

加賀藩からアジアへ

柴田正良

金沢大学人文学類長

金沢大学附属図書館長

金沢大学創基 150 年記念事業準備委員長

私は、かずかずの遠さに取り巻かれている一つの旗のようだ。
来る風を私は予感する。
その風を私は生きないでいることができない、
下の方では多くのものがまだ少しも身じろぎをしないときにも。

ライナー・マリア・リルケ「予感」『形象詩集』より
片山敏彦訳『リルケ詩集』みすず書房、1962年、60頁

金大創基 150 年とは

きっと学問的には「…効果」とか「…現象」とかといった名称が、認知科学や心理学や脳科学によって与えられているに違いない。それは、誰もがよく知っている経験であって、文脈のもたらす効果なのか、それとも時間が可能にする「同調」のせいなのか。たとえば、みんなが感極まって見ているドラマのワンシーンを自分が見る気もなく偶然に垣間見てしまったようなとき、役者のどんな感動的な台詞も仕草も、自分の心にはほとんど何も響かない。たとえそのワンシーンの意味が即座に理解できたとしても、心が動かされるには、それに「身を合わせる」だけの時間が必要なのだ。まったく同じ感覚刺激であっても、それを経験するまでに至るしかるべき時の熟成がなければ、悲劇も悲劇として見ることができない、ということだろう。

だから何であれものを正しく見るには、そのものが存在してきた歴史に少しの間でも身を浸す必要がある。このたび、金沢大学がそのアイデンティティを確認し、金沢大学とは何であって何であろうとするのかを大学内外に発信するに際して、私たちが、大学の源流を遡る「金沢大学創基 150 年記念事業」に乗り出した所以である。冒頭の詩人リルケの「予感」は、来るべき嵐におののきながらも、しかし希望を感じさせずにはおかない予感だ。金沢大学がこれから身をくぐらせる嵐のなかに希望を感じ取るために、私たちは、金沢大学の濫觴たる加賀藩彦三種痘所が開設された 150 年前の地点にまで遡らなくてはならなかった。以下では、この記念事業のうち、彦三種痘所跡地への石碑建立と、アジアの有力四大学の学長を招く「学長フォーラム in 金沢」の二つをごく簡単に紹介したい。

発祥の地を特定

すでに北國新聞（本年4月20日朝刊）に報じられたように、彦三種痘所は天然痘予防のための当時の最新鋭医療機関として設けられたのだが、その正確な場所はずっと突き止められずにいた。それがようやく「ここ以外にはなかり」というきわめて高い蓋然性をもって特定されたのは、ひとえに赤祖父一知・医学部記念館資料室学術顧問の執念ともいえる長年の追跡調査のおかげである。種痘所はほぼ現在の彦三郵便局の辺りと推定された。創基150年記念事業はこの彦三種痘所開設を記念し、その地に「金沢大学発祥の地」の石碑を建立することを決定し、今年秋に除幕式を行う運びとなった。碑文は本記念事業の準備委員である山本博・医薬保健学域長の起草によるものだが、なにしろ碑文を彫るべき石碑の面が狭い。そこでやむなく碑文原案を大幅に縮めたが、元の碑文は以下であった。

「種痘が天然痘という災厄を未然に防ぐとの事績は近代医学の価値を朝野に知らしめた。加賀藩は文久二年（西暦一八六二年）三月彦三種痘所を開設し、黒川良安、津田淳三、大田美農里、高峰元稔、鈴木儀六、伏田元幹ら計二十五名の医師が之に参画した。医師たちは「無給トシ其種痘所へ収納スル處ノ謝金ハ總テ蓄積シ」（「石川縣金澤病院沿革」）、金参拾五貫目を卯辰山養生所設立のため寄附した。斯くして彦三種痘所は、卯辰山養生所を経、金沢医学館、石川縣甲種醫学校、第四高等学校醫學部、官立金澤醫科大学、国立金沢大学、国立大学法人金沢大学へと続く系譜の淵源となった。彦三種痘所は此の地に存在したと推定され、金沢大学創基百五十年と金沢大学医学部創立百五十周年を記念し、茲に此の碑を建立する。」

11月5日（土）にお披露目予定の石碑では、子供にも読んでもらえるように字体や仮名遣いを平易なものに改めている。「先人たちの高い志に思いを馳せながら石碑を撫でると、医学類、薬学類、保健学類の入試に必ずや合格する」ということを、準備委員長の私でよければ、請け合うことに吝かでないのだが…

金沢の魅力アピールも

この石碑の建立が金沢大学のこれまでの姿を探索する象徴的な事業だとすれば、同じく本年の11月12日（土）に開催を予定している「アジア5大学学長フォーラム in 金沢」は、大学の未来を占う重要なイベントである。私たちは、アジアの躍進めざましい4つの国の大学に呼びかけ、北京大学前学長、ソウル大学長、ベトナム国家大学長、チェンマイ大学長の参加表明を得ることができた。このフォーラムの狙いは、アジアの世紀ともいえる21世紀の初めに、これまでの混沌としたアジアから協調と連帯のアジアに向かって、学術研究と留学生の交流に根ざした高等教育機関の果たすべき任務を、アジアの諸大学が揺るぎなく共有することにある。それは、中村信一・金沢大学長がフォーラムの「趣意書」で述べているように、「地球規模での出来事の連鎖を不可避にした人類の活動が、いまや国や民族の単位では解決不可能な諸問題をもたらし、その解決のために、それぞれの文化の

独自性と両立しうる普遍的な生存の基盤を築くよう強くわれわれに迫っているから」に他ならない。協調と連帯の必要性は、今回、はしなくも地球温暖化を引き起こす人間の無頓着な活動ではなく、3月のわが国の大震災が日本人の間に痛烈に思い知らせてくれたものである。

多様性と普遍性、差異と同一、この危ういバランスをうまく取ることこそが、アジアに位置する日本の未来にとって枢要なことであろう。それは互いの相違を理解することから始まる。その意味で、私たちのもう一つのミッションは、このフォーラムを通して、金沢大学だけでなく、芸術と文化が育んだ金沢という歴史都市の魅力を最大限に参加各学長にアピールすることである。フォーラムの会場を石川県立能楽堂に定め、古典芸能にも造詣の深い石田寛人・金沢学院大学名誉学長を司会者に迎えることができたのは、この点で大きな前進であった。しかし、ここから先が難問山積。金沢大学ならびに金沢を応援して下さっている企業と市民のすべてのみなさまに、ご支援とご協力をお願いするばかりである。